

## ご挨拶

国立女性教育会館女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供に取り組むとともに、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」を紹介する企画展示をシリーズで開催しています。

シリーズ12回目となる今回は、2021年に開催されたオリンピック・パラリンピックにちなみ、スポーツと女性をテーマとしました。パイオニアとして道を切り開いてきた女性たち、そして現在スポーツと女性・ジェンダー問題に取り組んでいる団体を紹介する資料を展示します。



2021年に開催された東京オリンピックは男女比がほぼ半々と史上初の「ジェンダーバランスの取れた」大会となりましたが、森大会組織委員会会長が女性蔑視発言で辞任するという日本のジェンダー問題があらわになった大会ともなりました。またスポーツにおける女性には、アスリートの盗撮、無月経といった身体的な問題や、コーチや監督、組織のリーダーといった意思決定層への登用等、課題がまだ多く残っています。

スポーツを楽しみ、発展させるうえでさまざまな障害を乗り越えた女性たち、そしてスポーツと女性・ジェンダー問題に取り組んでいる団体の実践の軌跡から、男女共同参画社会の形成をより一層推進するためのヒントを見つけていただければ幸いです。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な資料の利用についてご快諾いただきました方々にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

令和5年1月

独立行政法人国立女性教育会館

理事長 萩原なつ子

## 年表

年	事項
1875	東京女子師範学校設立
1876	藤村トヨ 生まれる
1880	二階堂トクヨ 生まれる
1894	日清戦争(～1895)
1900	第2回オリンピック大会(パリ)で女性が初参加(テニス、ゴルフ)
1902	私立東京女子体操学校設立
1903	専門学校令公布
1904	日露戦争(～1905)
1907	人見絹枝 生まれる
1911	『青鞥』創刊
1912	大正元年(7/30～)
1914	第一次世界大戦(～1918)
1922	二階堂体操塾設立
1923	関東大震災
1926	日本女子体育専門学校設立
1928	第9回オリンピック大会(アムステルダム)で人見絹枝が銀メダル
1931	人見絹枝逝去(24歳)
1939	第二次世界大戦(～1945)
1941	二階堂トクヨ逝去(60歳)
1944	東京女子体育専門学校に昇格
1947	日本国憲法、学校教育法施行
1950	東京女子体育短期大学、日本女子体育短期大学開校
1954	日本女子体育連盟(JAPEW)設立
1955	藤村トヨ逝去(79歳)
1962	東京女子体育大学開校
1964	第18回オリンピック大会(東京)
1965	日本女子体育大学開校
1972	アメリカで教育改正法第9編(タイトルIX)制定
1975	国際女性年
1979	国連総会「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約(女性差別撤廃条約)」採択
1981	WSFジャパン(女性スポーツ財団日本支部)設立
1989	平成元年(1/8～)
1994	第1回世界女性スポーツ会議(イギリス・ブライトン)
1998	特定非営利活動法人ジュース(JWS)設立
2002	日本スポーツとジェンダー研究会設立 (2005日本スポーツとジェンダー学会に名称変更)
2014	順天堂大学女性スポーツ研究センター設立
2019	令和元年(5/1～)
2021	第32回オリンピック競技大会(2020/東京)、 東京2020パラリンピック競技大会

# 藤村トヨ(1876-1955)と東京女子体育大学

## ～日本初の女子体操学校の設立～

### 体操教師となるまで

藤村トヨは、1876(明治9)年、香川県坂出村に生まれました。神童といわれるほど聡明であったため、学問好きの母タネは期待をかけ、トヨは勉学にはげみます。しかし体を動かすことをせずに勉強ばかりしていたため、身体が弱り学校を何度も退学することになります。1899(明治32)年4月、やや健康を回復した23歳のトヨは、女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)本科理科の2回生として入学します。しかし2年目から休みがちとなり1901(明治34)年9月帰郷します。2か月後小康を得、小学校の教員となり、体操やダンスを教えるうちに、次第に健康を回復しました。このことがきっかけとなり、トヨは自分の命を救ってくれた体育の道に一生を捧げる決意をします。



大正後期 藤村学園蔵

### 日本初の女子体操学校「東京女子体操学校」の設立

1902(明治35)年、「女子体操教員ヲ養成スル」ことを目的として、私立東京女子体操学校の設立願が東京府知事に出され、5月10日付で認可されます。設立を企画したのは、遊戯研究の第一人者であり、女子高等師範学校と日本体育会体操学校の教師であった高橋忠次郎(1870-1913)であったと考えられますが、公文書上の設立者は山崎周信となっています。同年11月22日には私立東京女子体操音楽学校と改称、以来通称「音体」として親しまれました。忠次郎は1900(明治33)年、当時体育界の第一人者であった坪井玄道の欧米留学のための後任として女子高等師範学校の体操科講師となり、トヨはその教えを受け、香川に伝えたのでした。

1904(明治37)年4月、トヨは東京女子体操音楽学校の教師に迎えられ、11月文部省の体操科教員検定に合格し、免許状を取得しました。1906(明治39)年12月忠次郎は渡米し、生徒数の減少等により1908(明治41)年2月、東京府から学校の閉鎖命令が出されます。このとき忠次郎からトヨを後任の校長にとの委任書が届き、31歳のトヨは重責を担うことを決心し、懸命な陳情と恩師らの支援により学校を存続させます。トヨはこの任務を忠次郎の帰国までと考えていましたが、1913(大正2)年忠次郎は米国で客死し、この学校に生涯をかけることとなりました。1907(明治40)年頃から10年あまり、生徒が10人以下と、苦難の日々が続き、トヨは私立高女の講師などを勤め、収入を学校の経営につぎこみます。そのさなか1914(大正3)年、38歳で東京女子医学専門学校(現東京女子医科大学)に入学、医学の知識を体育研究につなげました。

# 藤村トヨ(1876-1955)と東京女子体育大学

## ～学校の昇格、その後の発展～

### 中等教員無試験検定認可

トヨは苦難の中、1919(大正8)年学則を改正し、修業年限を2年に延長、夜間部を設置して学力体力共に堪えうるものには1年で卒業を可能とし、体操教員志願者には貸費生の規則を設けるなどの改革を行い、体操教員養成の実績をあげます。努力が実を結び生徒数が増加し、校舎が手狭となり、1921(大正10)年、吉祥寺に土地を借り入れ、翌年4月、日暮里から移転開校しました。

大正期には修業年限3年以上の学校が専門学校に昇格していきませんが、トヨは少数精鋭の塾的教育により、2年で卒業し専門学校と同等の力があることを世に認知させるために、1925(大正14)年中等教員無試験検定の認可申請をし、認められます。またこの頃トヨは改良服や姿勢についても研究を重ねました。

### 海外視察、ドイツから教師招聘

1928(昭和3)年5月、52歳のトヨは海外の体育事情視察のため、ドイツを中心に、ヨーロッパを一年かけて歴訪します。そして自分の研究した自然体操が、ドイツの体操に最も原理が一致していることを発見し、1931(昭和6)年にはドイツからG・ワルター、K・ブラントを教師として招聘しました。トヨは1929(昭和4)年、チェコスロバキアで開催された第3回女子オリンピック大会、還暦を迎えた1936(昭和11)年、ベルリンでの第11回オリンピック視察団にも参加、3回の渡欧を果たしています。

### 専門学校への昇格、短期大学設立

1937(昭和12)年の日中戦争、1941(昭和16)年の太平洋戦争開始により、学校体育は国民の心身を鍛錬する学科となります。この時代の趨勢に、トヨは1942(昭和17)年専門学校設置を決意し、文部省との2年にわたる折衝ののち、1944(昭和19)年、東京女子体育専門学校に昇格します。

戦後、学制改革に伴い、1950(昭和25)年4月、修業年限2年の東京女子体育短期大学となり、74歳のトヨは初代学長に就任します。

### 国立への移転と東京女子体育大学の設置

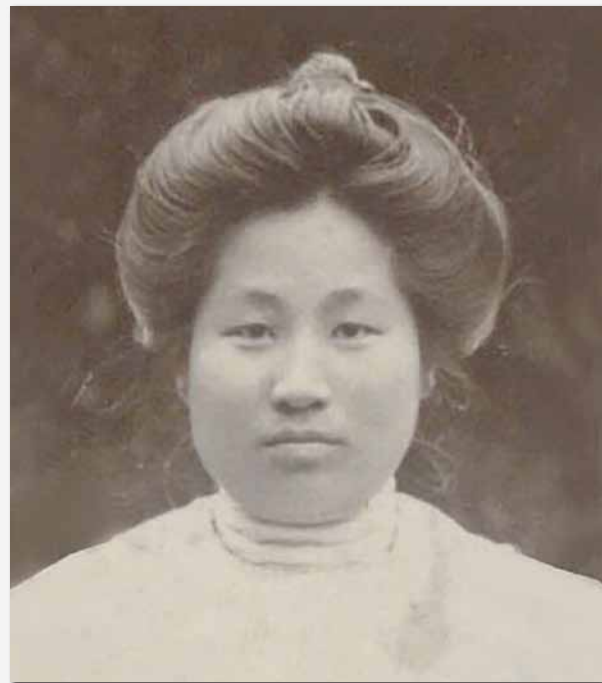
1955(昭和30)年1月、トヨは79歳で亡くなり、学長には妹の伊澤エイが就任します。エイは4年制大学創設と、手狭になった吉祥寺からの移転に取り組むこととなります。1961(昭和36)年、国立に移転、翌1962(昭和37)年、わが国初の女子体育大学、東京女子体育大学が誕生しました。その後1968(昭和43)年、短大に幼児教育科設置、1973(昭和48)年には幼児教育科を廃止し児童教育学科を設置します。2022年(令和4)年、藤村学園は120周年を迎え、藤村スポーツセンターを新設しました。

# 二階堂トクヨ(1880-1941)と日本女子体育大学

## ～体操教師となり、イギリスへ留学～

### 体操教師となるまで

二階堂トクヨは、1880(明治13)年、宮城県志田郡三本木村に生まれました。尋常小学校4年、高等小学校4年を卒業し、1895(明治28)年検定試験に合格、15歳で准教員として働き始めます。正教員を目指して尋常師範学校で学びたいと思いますが、宮城県では同年、女子部が廃止されてしまいます。トクヨは隣の福島の師範学校入学を思い立ち、福島民報社に手紙を書き、社長の小笠原氏が戸籍上養子縁組をしてくれることとなりました。小笠原トクヨとなって(1909(明治42)年二階堂家へ復籍)、1896(明治29)年入学、3年間を過ごします。卒業後、任地の小学校で教員となりますが、さらに東京女子高等師範学校を目指して猛勉強し、1900(明治33)年19歳で文科に入学、4年間学び、7科の教員免許状を取得して卒業します。



石川時代(25歳、洋装)  
日本女子体育大学蔵

1904(明治37)年、23歳で金沢の石川県立高等女学校に赴任、思いがけず最も苦手であった体操を主として担当することとなります。トクヨは赴任した年の夏、文部省の体操講習会でスウェーデン式教育体操を学び、また、体操が専門学校出身のキリスト教宣教師ミス・モルガンから個人指導を受けることができ、体操教員となっていました。

1907(明治40)年、高知県師範学校教諭兼舎監として赴任、体操を担当します。そして1911(明治44)年、30歳で東京女子高等師範学校助教授となります。

### イギリスへの留学

翌1912(明治45)年、トクヨは文部省より、体操研究のため2年のイギリス留学を命ぜられます。向かったのは、マダム・オスターバーグ(1849-1915、スウェーデン人)が設立し校長であった、キングスフィールド体操専門学校でした。マダム・オスターバーグは、体操を通じて女性の生活全般を合理的なものに改善していこうとするパイオニア養成を目標としており、教育は寄宿生活全般を通して行われました。トクヨは理論では生理学、衛生学、解剖学、実地では、教育体操、医療体操、舞踊、競技、教授法などを学び、1年3か月をこの学校で過ごし、大きな影響を受けます。その後イギリス各地の体操学校を歴訪し学びますが、1914(大正3)年第一次世界大戦が勃発、1915(大正4)年4月に帰国しました。

# 二階堂トクヨ(1880-1941)と日本女子体育大学 ～学校の創設、その後の発展～

## 東京女子高等師範学校での対立

1915(大正4)年5月、トクヨは東京女子高等師範学校教授に昇任し、留学によって身に着けた新しい体育観の普及・実践に取り掛かります。しかし期待されていたのは、永井道明教授が作り上げた「学校体操教授要目」の普及・実践でした。トクヨにとって「学校体操教授要目」は形式的ドリル的であり、また遊戯(ダンス)や体操服についても対立し、次第に孤立することとなります。トクヨは1919(大正8)年、「全国体操女教員会」を組織し会長となります。また女子体育振興のための雑誌『わがちから』を1921(大正10)年5月刊行開始、翌1922(大正11)年、東京女子高等師範学校を退職しました。

## 二階堂体操塾を創立

1922(大正11)年、41歳のトクヨは代々木山谷に二階堂体操塾を開塾します。資格は得られないものの、全寮制、修業年限1年で中等教員の実力をつけさせるということで志願者は多く、定員22名のところ40数名を受け入れます。1年後卒業生43名が中等学校に就職しました。翌1923(大正12)年には30名の定員に倍以上の生徒を受け入れますが、9月1日関東大震災により建物が使えなくなります。トクヨは新しい土地を探し、塾は松沢村松原に移転しました。

## 日本で初めての女子体育専門学校

体操塾は4年間に500名近い新進気鋭の女子体操教員を送り出し、1926(大正15)年、財団法人日本女子体育専門学校が設立され、日本最初の体育専門学校となりました。そして3年後専門学校となって第1回の生徒が卒業するときには、中等教員無試験検定が許可されます。トクヨは理事長兼校長兼教授兼舎監兼事務員として働き続け、1941(昭和16)年4月入学式の朝に倒れ、7月17日60歳で亡くなりました。

## 日本女子体育短期大学、日本女子体育大学設立、大学院の設置

1950(昭和25)年学校法人二階堂学園が設立され、同年体育科と保育科を持つ日本女子体育短期大学が誕生します。1965(昭和40)年には、待望の日本女子体育大学が誕生、現在の烏山キャンパスに鉄筋コンクリート3階建ての校舎が建設されました。その後、短期大学を移転させ、烏山キャンパスへの一体化を進め、1989(平成元)年基礎体力研究所、1993(平成5)年男女共学の大学院修士課程設置、1999(平成11)年大学の改組を行い、短期大学の募集停止など、研究機関の整備・充実につとめ、2022年創立100周年を迎えました。

# 人見絹枝(1907-1931)

## ～日本人女性初のオリンピックメダリスト～

### 高等女学校でテニス、陸上競技に出会う

人見絹枝は、1907(明治40)年、岡山県御津郡福浜村に生まれました。父は教育に理解があり、1920(大正9)年、県立岡山高等女学校に入学します。当時女学生にテニスが流行しており、絹枝も猛練習に励み、各地の大会で優勝します。4年生のときに岡山高女で競技大会が開かれることとなり、絹枝に出場が要請されます。脚気の兆候があったにもかかわらず、走り幅跳びに出場、4m67という日本最高記録(非公認)を出して優勝しました。



### 二階堂体操塾への進学、アスリートの道へ

校長は絹枝の才能を見込み、二階堂トクヨが1922(大正11)年に創立したばかりの二階堂体操塾への進学を勧め、1924(大正13)年、17歳の絹枝は3期生として入塾します。その年岡山での陸上競技大会で絹枝は三段跳びに出場し、10m33の世界新記録で優勝、新聞各紙で大きく報じられます。当時塾は1年制で、卒業した絹枝は体操の教師として就職しますが、1学期が終わるころトクヨから要請があり、辞めて台湾へ実技講習の講師として赴任、その後塾の専門学校昇格のためにトクヨの片腕として働きます。そして1926(大正15)年、専門学校昇格後、大阪毎日新聞から熱心な誘いがあり入社します。同年8月スウェーデンで開催された第2回国際女子競技大会に日本人としてただ一人出場、走り幅跳びと立ち幅跳びで世界新記録を出し、個人優勝をなしとげました。

### アムステルダム・オリンピックで銀メダル、後進の育成

1928(昭和3)年、第9回オリンピックに女子陸上競技が初めて導入され、絹枝は日本人女性でただ一人100mと800mにエントリーします。100mのメダルを狙っていましたが準決勝でよもやの敗退。走ったことのない800mに挑戦することになります。8月2日、絹枝は800mを走り切り、ドイツの選手ラトケに次ぐ2位で銀メダルを獲得します。ゴール後全員が倒れた大変なレースでした。

1929(昭和4)年、絹枝は色々な大会で世界新記録を出し、活躍に触発された女子選手が出てきます。翌1930(昭和5)年プラハでの第3回国際女子競技大会にはチームを派遣することが決まりますが、遠征の費用のための寄付の手配等、仕事や練習以外の激務に追われます。プラハの大会は5人の選手とともに参加、絹枝は個人総合第2位、日本は18か国中第4位の成績を収めました。その後欧州各地で親善試合に出場し、絹枝は体調を崩します。11月の帰国後、絹枝は弱ったからだで各地の講演やコーチに出かけ、1931(昭和6)年3月に入院、そして8月2日、24歳で生涯を終えました。

## 関連団体紹介

# WSFジャパン(女性スポーツ財団日本支部)

## ～WSFジャパンが目指す社会とは～



日本は明治維新以降、欧米文化の1つとしてスポーツを導入しました。しかし、日本では“男性優位”という考え方が強く、女性の視点を欠くものでした。私がそれに気づかされたのは、1976年に報知新聞社から発行された単行本『キング夫人自伝 テニスの女王で終わりたいくない』を読んだからです。

4年後の1980年に第1回国際女性スポーツ会議を東京・プレスセンターホールで開催しました。国際的な選手は夏季だけでなく冬季も、そして市民レベルの立場からの発言も期待しました。パネリストは以下の7人です。(敬称略)

体操＝ベラ・チャスラフスカ(チェコスロバキア:当時)、陸上競技短距離＝エベリン・アシュフォード(米国)、テニス＝バージニア・ウェード(英国)、スキー＝アンネマリー・モザー・プレル(オーストリア)、遠泳＝ダイアナ・ナイアド(米国)、登山＝今井通子、マラソン＝トシコ・デア(米国)。

デアさんは日本人の市民ランナーです。それ以外は全員、世界の舞台で活躍していました。檀上の彼女たちは大会で見るユニフォーム姿でなく、ワンピースなど女性らしい服装で並び、当時の聴衆やマスコミが初めて目にする姿でした。

この会議では、日本側の国際会議組織委員会の委員として7人の女性にお願いしました。事前の交渉で私が痛感したのが、彼女たちの“男性優位”という考え方でした。戦前に大活躍されたかつての有名選手が「副委員長ならいいですよ」と、委員長になることを固辞したことに大きな衝撃を受けました。

こうした経験から、翌1981年末に日本の女性スポーツの在り方を考えるWSFジャパン(女性スポーツ財団日本支部)をスタートさせました。あれから40年。当時は無名で実績もなかった34歳の私が、今も代表を務めています。

近年の女性選手の活躍ぶりには頼もしさを感じますが、彼女たちを支援する組織は「“男性優位”ではない」と言えるのでしょうか。女性がよりスポーツを楽しめる社会の実現は、日本ではまだまだだと感じる日々です。

WSFジャパン代表 ミツ谷洋子



# 関連団体紹介

## 特定非営利活動法人ジュース

### (JWS:Japanese Association for Women in Sport)

1998年5月、アフリカ・ナミビアで開催されたIWG(International Working Group on Women and Sport)主催「第2回世界女性スポーツ会議」に参加した小笠原悦子氏が、「2006年の第4回世界女性スポーツ会議はアジアで開催する」というアナウンスを聞いたことが、誕生のきっかけでした。当時、世界の女性スポーツムーブメントに関心を示し、会議に参加していたアジア人は3カ国から5名。世界のムーブメントから取り残されていたアジアで世界女性スポーツ会議を開催できるのは日本だけと小笠原氏は決意します。

同年成立した「特定非営利活動法人促進法(NPO法)」、翌1999年「男女共同参画社会基本法」が追い風となりました。この会議招致によって、日本そしてアジアに、スポーツ界における「男女共同参画」という概念を広げようという構想を固め、NPO法人を立ち上げます。名称は「NPO法人ジュース(Japanese Association for Women in Sport: JAWSからAをはずして、JWS:ジュースと読めたので命名)」とし、設立総会に参加した13名の会員によって、8年構想がスタートしました。

JWSはアジアに女性スポーツのネットワークを作ることに邁進し、2001年には第1回アジア女性スポーツ会議を開催します。同会議の中で、AWG(アジア女性スポーツワーキンググループ)が結成され、2007年まで2年に1度、アジア女性スポーツ会議を開催し、アジアオリンピック評議会(OCA)の中に「女性スポーツ委員会」を設立することに成功しました。日本のスポーツ政策の中に「女性」を入れ込むことについても成果をあげました。

2006年「第4回世界女性スポーツ会議くまもと」は、約100カ国から約700人と過去最高の参加者を得て大成功に終わり、JWSは会議招致という目的は達成します。しかしその後もメンバーは、そのネットワークと信頼を生かし、様々なプロジェクトでそれぞれの立場から、女性スポーツ発展のために貢献しています。

現在は、JWSのミッション「Education(普及・啓発)」「Leadership(女性リーダー)」にあたる「女性リーダーの育成」のために、2014年順天堂大学に設立された「女性スポーツ研究センター(JCRWS)」が2015年から開催している「女性リーダー・コーチアカデミー」(WCA)を、共催しています。



JWSウェブサイト  
QRコード



# 関連団体紹介

## 日本スポーツとジェンダー学会 (JSSGS)

女性学が日本の大学教育の中で広まり、女性とスポーツについて研究をする人が少しずつ出てくる中、点在していた研究者たちが、京都での研究会を通じて集まり『目でみる女性スポーツ白書』(大修館書店、2001年)、アン・ホール著“Feminism and Sporting Bodies: Essays on Theory and Practice”(1996)の翻訳『フェミニズム・スポーツ・身体』(世界思想社、2001年)を出版することになったことを契機に、学会創設への機運が高まってきました。

2002年6月、「スポーツにおける男女平等・公平の達成」「ジェンダー・フリーなスポーツ文化の構築」を目標に、「日本スポーツとジェンダー研究会」が設立されました。主な活動内容は、研究会の開催、研究誌『スポーツとジェンダー研究』の発刊、会員の研究に資する情報の収集・紹介、研究の学際的・国際的交流、ホームページにおける情報公開などとなっています。

2005年7月、第4回総会において「日本スポーツとジェンダー学会」に名称を変更しました。

JSSGSは5年ごとに記念大会を開催しており、アン・ホール、グードウルン・ドルテッパー、トニー・ブルースなどの海外の研究者を招聘しました。また、会員がウィメンスポーツ・インターナショナル(WSI)の役員を務め、国際学会、世界女性スポーツ会議等でも発表するなど、国際的な活動に取り組んでいます。

また、学術組織の役員にJSSGSの会員が入るよう意識的に行動し、断らずに引き受けるという姿勢で臨んできました。学会では女性役員を増やすためのポジティブ・アクションに関する議論を継続して行い、その結果、日本体育・スポーツ・健康学会(旧・日本体育学会)役員や、日本学術会議の健康・スポーツ科学分科会委員に女性が増えています。

JSSGSは、2022年設立20周年を迎えました。これを記念した第21回大会では、20周年記念事業として、学会創設に関わった主要メンバーが登壇、当時の状況や学会設立に込めた思いを語っていただき、その継承を試みています。

この他、研究誌『スポーツとジェンダー研究』を毎年1回刊行しているほか、『スポーツ・ジェンダー学への招待』(2004年)、『スポーツ・ジェンダーデータブック2010』(2010年、2013年に第2版)、『データでみる スポーツとジェンダー』(2016年)、『よくわかるスポーツとジェンダー』(2018年)などの出版物を刊行しています。

# 関連団体紹介

## 順天堂大学女性スポーツ研究センター (JCRWS)

2011(平成23)年、順天堂大学は文部科学省委託事業「チーム『ニッポン』マルチサポート事業(女性アスリート戦略的強化支援方策の調査研究)」を受託し、その報告書として2013(平成25)年に『女性アスリート戦略的強化支援方策レポート』を作成しました。

2014(平成26)年8月、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けて「女性スポーツ研究センター」設立、「女性アスリートの支援方策」を「研究」という視点から実行しています。同年10月には、順天堂大学医学部附属順天堂医院および浦安病院に日本初となる「女性アスリート外来」が開設され、JCRWSが実施する研究・支援活動とのコラボレーションを実現しました。

JCRWSは「女性アスリートのコンディショニング」に関する研究、「女性リーダーの育成」と「スポーツ参加促進」の方策提案、女兒から高齢女性まですべての年代を対象とした「健康増進とパフォーマンス向上」の3つをミッションとしています。

「女性アスリートのコンディショニング」に関する研究では、女性アスリートのためのオンラインヘルスチェックツール「PPE for female athletes (Pre-participation Physical Evaluation; 女性アスリートの運動参加前健康評価)」や、運動量に対するエネルギー不足から、女性が無月経など3つの障害(FAT: Female Athlete Triad)に陥っている、もしくは陥りやすい状態かどうか気づくための「FATスクリーニングシート」、『女性アスリートダイアリー』(2021年版からは一般発売)などを作成、提供しています。

「女性リーダーの育成」では、女性リーダー・コーチに向けた、女性アスリートのコンディショニング、ダイバーシティマネジメント等を盛り込んだ、日本独自の人材育成プログラムを開発。2015(平成27)年から、NPO法人ジュース(JWS)らとの共催で「女性リーダー・コーチアカデミー(WCA)」を開催しています。

「スポーツ参加促進」では、『中高年女性のスポーツ参加調査(2018~2020年)』をはじめ、あらゆる年代の男女を対象に調査・研究を実施しています。

「健康増進とパフォーマンス向上」では、身長とLBM(除脂肪体重)に着目した成長・コンディション管理アプリ「スラリマッスル」などを作成、提供しています。



JCRWSウェブサイト  
QRコード

